

J. Deplouge and G. Deneckere (eds.), *Mystifying the Monarch: Studies on Discourse, Power, and History*

タイトルが示すとおり、本書は王権の神秘性あるいは君主の聖性と言説が取り結ぶ関係を解き明かすこととした論集である。時代的には、中世から現代までを幅広くカバーしている。しかし、編者が序文で記すように、言説と権力をめぐる文化史研究に対する反省をふまえ、中世的な王権の神秘化から近現代的な王権の脱神秘化へと直線的に歴史が展開するとの通俗的な図式は、ここではとどめられていない。そうではなへ印刷術やマス・メディアの発展により引き起こされる条件の相違によって時代の刻印を帯びつつも、言説による神秘化と脱神秘化の過程は表裏一体の関係で王権の性格を通時的に規定し続けてきたとの見方が提示されており、ここに類書にはなぐ本書の新

しさがあるだろう。序文に続く構成は以下  
のようになっている。

中世を代表した第一編「Monarchy's Medieval Monologism?」や、その困難を  
ふたせぬ A. Boureau, "How Christian Was the Sacralization of Monarchy in Western Europe (Twelfth-Fifteenth Centuries)?"、J. Deplouge, "Political Assassination and Sanctification. Transforming Discursive Customs after the Murder of the Flemish Count Charles the Good (1127)", E. Lecuppre-Desjardins, "Et le prince répondit de par sa bouche: Monarchical Speech Habits in Late Medieval Europe"; G. Lecuppre, "Ideal Kingship against Oppressive Monarchy: Discourses and Practices of Royal Imposture at the Close of the Middle Ages".

近世を扱った第二編「Monarchy and the Emergence of the Public Sphere」や、その困難を構成する J. Pieters and A. Roose, "The Art of Saying 'No': Premonitions of Foucault's 'Governmentality' in Étienne de la Boétie's *Discours de la servitude volontaire*"; K. Sharpe, "Sa-

cralization and Demystification. The Publicization of Monarchy in Early Modern England"; M. Jacobs, "King for a Day: Games of Inversion, Representation, and Appropriation in Ancient Regime Europe"; L. J. Graham, "Fiction, Kingship, and the Politics of Character in Eighteenth-Century France".

最後は第三編「Popular Monarchy in the Age of Mass Media」や、その困難をふたせぬ J. Grever, "Staging Modern Monarchs: Royalty at the World Exhibitions of 1851 and 1867"; J. van Osta, "The Emperor's New Clothes: The Reappearance of the Performing Monarchy in Europe, c. 1870-1914"; H. te Velde, "Cannadine, Twenty Years on. Monarchy and Political Culture in Nineteenth-Century Britain and the Netherlands"; G. Deneckere, "The Impossible Neutrality of the Speech from the Throne. A Ritual between National Unity and Political Dispute. Belgium, 1831-1918"; M. Van Ginderachter, "Public Transcripts of Royalism.

Pauper Letters to the Belgian Royal Family (1880-1940)".

このように、本書は時代ごとのセクションに区分されており、これはそのまま王をめぐる言説やイメージが流布する社会的条件の相違に対応している。もちろんこの区分は重要であり、読者はこれらを最初からセクションごとに通読することで、メディアの変容が言説の働きに及ぼす影響を知ることができよう。しかし、ここではあえて時代ごとのセクションを横断し、方法論的に共通する論考をいくつかピックアップしつつ紹介することで、本書の特徴と面白さを少しでも具体的に伝えよう試みたい。まず、第一部の *Deplaigne* の論考は、暗殺された君主を聖人化する二つの記録を取り上げ、パフチンの言説理論を駆使しつつ聖人伝ジャンルと社会的コンテクストが切り結び関係や、ジャンルの逸脱からその記録が帯びるに至るポリフォニックな性質を明らかにしている。また第二部の *Grevier* の議論は、ルイ一五世治下の不敬小説ともいべき四篇の作品を取り上げ、個人の性格を描き出す小説ジャンルの発展とその君主への適用が、王権の脱神秘化に繋

がったと指摘する。このように、支配者の聖性や神秘性が、ジャンルの法則に従った王権の言説化と社会的コンテクストとの緊張関係のなかで生み出され、あるいは突き崩されていく様を明らかにするといった手法は、本書に収められたいくつかの論文の特色である。中世にしばしば見られた偽君主事件の背後に僭称者を支持する貴族集団の姿を読み取り、極端な形で君主家系に突きつけられた君主の理想像のあり方とこれを可能にする中世的言説構造の存在を探る *Leopoldre*、テューター朝期から名誉革命期に至るまで王権が聖化と脱神秘化という対立する性格の運動を弁証法的に乗り越えようとした試みを扱った *Sharpe*、民衆や宮廷人により実施された愚者の王に代表される儀礼の実践が、君主や王権のイメージを喚起・形成し、風刺や議論を誘発する象徴的な機能を帯びたとする *Jacobs*。彼らの議論も、言説と社会的コンテクストのせめぎ合いに着目し、そのなかで正負の王の肖像がときに反転しつつ、もつれあいながら君主制の歴史的ダイナミズムを映し出していることを明らかにするのである。しかし、言説が中心を貫くテーマである

とはいえ、本書に収められたいくつかの論考ではカントロヴィッチ学派やキヤナダインによる歴史的考察、そして人類学的成果に導かれてきた王権をめぐる儀礼研究との接続もうまく試みられている。たとえば、第一部の *Leopoldre-Dejardin* の議論は、一五世紀の英仏君主たちの発言が、外交儀礼から内政審議に至る様々な政治的シチュエーションにおいて、外交的しきたりや君主鑑的な政治モラル、政治の実務的有効性に規定されつつ、それらの狭間でとりえた揺れ幅を見定めようとするものである。こうした儀礼の場における発言の形式から内容までを捉え、あるいは王の儀礼とこれにより喚起される世論の様態を把握しようとする研究は、とりわけ第三部に多く見られる。一九世紀の英仏で開催された万国博覧会への王（あるいは皇帝）の参列やその演出、さらにこれを描いた印刷物とネイションの創出の関係に焦点をあてた *Grevier* の議論、これと問題点を共有するがゆえに併せて読まれるべき「演劇君主制」を扱った *van Osta* とキヤナダイン批判を行う *de Valde* の論考、そして王国独立以降、第一次大戦までベルギーで見られた王の議会開

会演説とこれに伴う儀礼を素材に、政治的実権をもちえない王の演説がもつ政治性を明らかにした Daneekere の考察などがそれである。

編者の言葉を採用するなら、言説と社会慣行の絡まりを対象とし社会的なるものの復権をうたう「歴史主義的転回」Historical turn 以後の時代にあつて、本書は王権という古くて新しいテーマを料理するための選りすぐりのレシビ集といった趣も有している。王権に関心をもつ様々な地域・時代の専門家に一読をお薦めしたい。

(296 pp, 2006, Amsterdam University Press)

(書名秀記 清泉女子大学専任講師)

## 受 贈 誌

(二〇〇九年四月一六日)  
(二〇〇九年四月二七日)

- 山口大學文學會志(山口大学文学会) 五九  
東洋史研究(東洋史研究会) 六七―四  
アジア研究所所報(亜細亜大学アジア研究所) 一三四  
神戸薬科大学研究論集「*Life*」(神戸薬科大学教養課程共同研究室) 九  
国立歴史民俗博物館研究報告(国立歴史民俗博物館) 一四六  
国立歴史民俗博物館研究報告(国立歴史民俗博物館) 一四五  
国立歴史民俗博物館研究報告(国立歴史民俗博物館) 一四七  
国立歴史民俗博物館研究報告(国立歴史民俗博物館) 一四九  
国立歴史民俗博物館研究報告(国立歴史民俗博物館) 一四八  
オリエント(日本オリエント学会) 五一―二  
東方學報(京都大学人文科学研究所) 八三  
美術研究(東京文化財研究所) 三九七  
会) 一三三  
私教美術研究上野記念財団助成研究会報告書 研究発表と座談会(代表 西上実) 三六  
経済科学(名古屋大学大学院経済学研究科) 五六―四  
岐阜経済大学論集(岐阜経済大学学会) 四二―三  
栃木県立文書館研究紀要(栃木県立文書館) 一三  
栃木県立文書館だより(栃木県立文書館) 四四  
哲學研究(京都哲學會) 五八七  
正倉院紀要(宮内庁正倉院事務所) 三一  
松本市史研究(松本市) 一九  
帝京史学(帝京大学文学部史学科) 二四  
中央研究院 歴史語言研究所集刊(中央研究院歴史語言研究所) 八〇―一  
大東文化大学漢學會誌(大東文化大学漢学会) 四八  
国立歴史民俗博物館研究報告(国立歴史民俗博物館) 一五〇  
東アジア研究(大阪経済法科大学アジア研究所) 五一